

平成 3 1 年 度  
宮崎国際大学 教育学部  
A0入学選考(第2回)

試 験 問 題  
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題 次の文章を読んで、教師は「メンター（助言者）」としてどう子どもと接したら良いか、あなたの考えを八〇〇字以内で述べて下さい。自分の体験を交えながら述べても構いません。

自分の意志 メンターが照らす

羽賀翔一（漫画家）

80年前から読み継がれてきた小説「君たちはどう生きるか」（吉野源三郎著）を昨年、漫画化しました。恥ずかしながら、話を頂くまで原作を知らず、お堅い教養書だろうと思って読み始めました。

でも、主人公のコペル君が街を歩く人を見て「分子みたい」と思う場面から始まるように、言葉ありきでなく、叙情的な部分がしっかりと描かれていました。誰もが持っている、でも時と共に記憶からこぼれ落ちてしまったような経験からコペル君が感じたことを、「おじさん」と一緒に言語化していく。題名は問いかけでも、答えは書かれていない。こう生きなさい、と押しつけるのではなく、考え続けるための姿勢を書いた本でした。

吉野さんの息子さんにも話を伺いました。父が作品を書いた時は軍国主義まっさかりで、国全体が戦争に突き進む状況への危機感が強かった、それではいけないという思いを書きたかったが、検閲（けんえつ）が厳しくてやむなく児童書にした、と。作品中、子どもたちが意識せざるうちに集団で化け物のような場面がありますが、まさに社会全体もそうなるようとしていると伝えたかったのでしょう。無自覚なまま何かの一部に加担してしまうことは、いつの時代も人間の本質的な問題としてある。時代背景を前面に出せず、教室の出来事などに翻訳したことで結果的に普遍的な作品になり、時代を問わず共感されるようになったのだと思います。

漫画にする以上は面白いものにしようと、キャラクターの心情にギリギリまで迫るため、自分の経験の引き出しを片っ端から開けて感情を重ね合わせました。僕自身、コペル君と同じように母子家庭で育ち、年上のいとこの影響で絵が好きになった。小学校で、いじめられっ子をかばえずに後悔した経験もありました。大学では教員免許をとって先生になりましたが、本当に自分のやりたいことかと悩んでいた。「漫画家になりたい」という気持ちを、恥ずかしくて誰にも言えずにごまかし続け、就職活動のエントリーシートは1枚も書けませんでした。

悩んでいる時に求めていたのは、やっぱり「おじさん」のようなメンター（助言者）でした。友人も少なかった僕を支えたのが、夏目漱石の「私の個人主義」。作家になるまでもんもんとしていた漱石は、自分が進むべき道はここだったんだと心の底から思える瞬間がないといけない、と書いていた。心を打たれ、ごまかさずに夢に挑（いど）もうと思いました。4年の冬、思いをぶつけた漫画を描き上げて賞に応募した時、細胞が全て入れ替わったようなすがすがしい気持ちでした。その作品がデビューにつながりました。

「いま君が苦しみを感じているのは、正しい道に向かおうとしているからだ」という「おじさん」の言葉があります。この視点は、苦しんでいる人自身は持ちづらい。自分の苦しみが何なのかを整理できない時、メンターがこういう言葉をかけてくれることで、正しい道に進む力を振り絞れるのです。メンターは、本でも動画でもいいのかもしれない。人はそうやって生きていくという思いが吉野さんの根本にあるからこそ、この作品の題名は「君

は…」ではなくて、「君たちは…」なのではと勝手に解釈しています。

希望とは、そうして見つかった自分の意思からこそ、生まれるものだと思います。だから、希望を見つける第一歩は、自分を知ること。人は、それぞれ経験も進むべき道もバラバラだからこそ、自分の経験を端緒（たんしょ＝手がかり）に、自分で考えることを放棄してはいけないのでしょう。何か大きな意思に皆で同調するのではなくて、一人一人の意思をつなぐことでこそ、世の中は形づくられていくからです。

何が自分の考えで何が受け売りか、自分でも分からないほど、情報が氾濫（はんらん）する時代です。この情報の中をどう歩くか。まさに意思の力で地図を持てればいいのですが、僕はまだ、自分の地図はこうだとは言えない。地図をはっきりさせていくためにも、これから自分が漫画家として何を描くか、自分も楽しみたいと思っています。

（朝日新聞 平成30年1月5日）

\*羽賀翔一 37年に発表された原作を漫画化した「漫画 君たちはどう生きるか」は100万部のヒットになった。

平成 3 1 年 度  
宮崎国際大学 教育学部  
A0入学選考(第 4 回)

試 験 問 題  
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題 次の文章を読んで、筆者の言う「哀しみ」の力とはなにか、またあなたは「哀しみ」の力についてどう考えるか、八〇〇字以内で述べて下さい。

アンデルセンさん

角野栄子（作 家）

もうそろそろ、大事に抱えていた品々を整理しなければ——。これが今年の課題でした。とっくにやっておかなければならない歳になっていたのです。それで、時間を見つけては、仕分けを始めました。ところが、押し入れや引き出しの奥から取り出した品々を手にした途端<sup>とたん</sup>に、心は思い出の中にどっぷり<sup>なっ</sup>。懐かしさの旅に出てしまいます。ふと思いました。「私にはもう、『思い出』しかないの？ 『これから』はないの……？」そんな時に、『国際アンデルセン賞作家賞』受賞のお知らせを受けました。まだ私にも、これから開ける扉があるかもしれない。そんな明るい空気をはこんでくれたのです。

ハンス・クリスチャン・アンデルセンさんの作品と初めて出会ったのは、「マッチ売りの少女」というお話だったと思います。私もこの少女と同じくらいの歳でした。ご存じのように、こごえるように寒い大晦日<sup>おおみそか</sup>のお話です。マッチ売りの少女は寒さの余り、売りもののマッチに火をともしてしまいます。すると、その小さな光の中に、暖かなストーブや、ごちそう、クリスマスツリーが現れるのです。最後には大好きだったおばあちゃんまで。お話は残酷なほど悲しい終わりを迎えます。このマッチ売りの少女はアンデルセンの母親がモデルだと言われています。読んだ後、小さい私は泣きました。でも、どこかでうらやましいと思っていたのです。マッチをともして、大好きなおばあちゃんにまた会えたんだもの。五歳の時に母親を亡くしていた私は、少女に憧れました。

一九六一年に、初めてデンマークのフュン島、オーデンセのアンデルセン博物館を訪ねました。ガラスケースの中に、一見小さなぼろ布<sup>かたまり</sup>の塊のようなものが展示されていました。

説明を読むと、アンデルセンが、本を見せてくれる近所の裕福な婦人に自分で作って贈った『針刺し』だということです。年月がたって、いささか色も形も古びていたとはいえ、出来のいい作品にはとても見えませんでした。

想像するに、六、七歳のアンデルセン少年は、婦人の親切に何かお礼がしたかったのでしょう。小さな手で、必死に針刺しを作っている姿を想像すると、なんとも切ない気持ちになります。階級差のはっきりとしている時代で、家に入ることを許され、本を見せてもらえるなんて、めったにないことだったはずです。本好きの貧しい少年は、どんなに心躍らせたことでしょう。感謝の気持ちを表したい。でも、それだけではなかったように思えるのです。彼にとって、婦人との交流は、将来につながる一筋の光だったのではないか。このつながりを失ってはいけない、そんな切実な気持ちが、針刺しから伝わってきました。そして、アンデルセンが一生持ち続けた複雑な心に触れた思いがしました。

彼はよく旅をしています。意外に遠くまで。素晴らしい旅行記もいくつか書いています。

その時、持ち歩く荷物が博物館に展示されていました。まずおなじみの山高帽を入れるケース、ブーツ用のケース、大きな皮のトランク、そしてその脇に直径ニセンチほどのロープがぐるぐる巻きで置いてあったのです。「一体、何のために……？」

当時は機関車が通るところはごく少なく、ほとんどは馬車旅行でした。旅行をする頃には、アンデルセンもある程度余裕があり、従者もいたかもしれません。それにしても、このロープはかさばるし重そうです。宿場の宿は、大方は二階建てで、一階は食堂、客室は二階です。そこでもし火事が起きたら……？ そのためのロープだったというのです。今よりも火事が多かったとしても、そんなに<sup>ひんぱん</sup>頻繁に起こるものでしょうか。災難に<sup>ねら</sup>狙い撃ちされると思い込んでしまう、彼の不安を感じました。

貴族の館に呼ばれ、大人にも子供にも歓迎され、滞在をしながら、即興のお話を語る。そういったお話の中から、今に至るまで世界中で読まれている物語が生まれていきました。童話作家として大成功を収めたと言っていいでしょう。でも、彼の心の底にある幼少時の哀しみの記憶は、マッチの炎のように消えることはなかったのです。

哀しみには力があります。贈り物があります。それはけっして小さなものではないと思います。見えないものではあるけれど、もしかしたら、喜びより大きい贈り物かもしれません。

(『文藝春秋』2018・6)

平成 3 1 年 度  
宮崎国際大学 教育学部  
A0入学選考(第 5 回)

試 験 問 題  
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

## 問題

つぎの文章は子どもを叱（しか）る難しさ、大切さについて書かれています。教師や幼稚園教諭・保育士等の立場から子どもを叱る場合、あなたはどのような点に配慮しますか。自分の体験を踏まえて、あなたの考えを述べて下さい。

また、最後の行「こどもは、おとなの全身全霊を、ちゃんと畏（おそ）れる。」とはどういうことでしょうか。説明して下さい。（八〇〇字以内）

### 母の全身全霊に教わる

石田 千（作家）

ぼんやりしたこどもだった。朝いちばんに叱られて、昼にはまたおなじことをして、叱られた。

幼稚園のころ、うちに遊びにきていたお友だちと、お人形のとりあいになった。

こっちは栗いろの髪を、あっちはすらりとした脚をひっぱり、気の強いお友だちが勝ちとった。

悔（くや）しくて、つくちから大声がとび出た。

…いじわる。あんたなんか、死んじゃえ。

となりの部屋の、ミシンがやんだ。

仕立ての仕事をしていた母が、すっつんで来た。糸くずだらけで仁王（におう）立ちになると、いま死ねっていったねときく。

ぶんとうなずくと、母は身をかがめ、ぐいと顔を近づける。

まんまるの、おおきい、おっかない目玉。両腕を、がっちり押しえられる。からだを揺（ゆ）すられ、腹からの大声を浴びる。

…あのね、死ぬってというのは、とっても大変なことなんだよ。だから、ひとに死ぬなんていったら、だめなの。絶対にいっちゃいけないんだよ。

わかったね。にらまれ、半ベそでうなずいた。

となりで、やっぱり半ベそになっているお友だちは、お人形どうぞと返してくれた。仲よくね。母はいいおき、部屋を出て、またいそがしいミシンの音がはじまった。

いろんな考えがあってよい。そういう世となり、こどもに生き死にの尊さを教えるときさえ、あれこれ迷う。

もうすぐ五十になるというのに、まっすぐ叱れず、なさけない。

ぼんやりしたこどもも、よっぽど懲（こ）りて、二度といわないことにした。

理屈ぬきに、のみこんだ。おとなとこども、五分と五分で教わった。

こどもは、おとなの全身全霊を、ちゃんと畏（おそ）れる。

（宮崎日日新聞 平成30年5月6日）